

各科活動報告

集中治療科

担当医

○北山 仁士(集中治療科部長)

認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本心臓血管外科専門医・指導医／臨床研修指導医／医学博士／近畿大学心臓血管外科客員教授

○吉川 健治(集中治療科医長)

認定資格：日本外科学会外科専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医

○木村 誠志(麻酔科部長) (~2020/6)

認定資格：日本麻酔科学会麻酔科専門医・指導医／厚生労働省麻酔科標榜医／医学博士／臨床研修指導医

○鎌本 洋通(麻酔科部長) (2020/7~)

認定資格：日本麻酔科学会指導医・専門医／日本心臓血管麻酔学会専門医／日本ペインクリニック学会専門医／周術期経食道心エコー認定医／臨床研修指導医

活動報告

ICUは全科の集中治療を担うgeneral ICUとして、人工呼吸器、IABP、PCPS(ECMO)等の生命維持装置を駆使した呼吸・循環管理、血液浄化療法による体液管理から、代謝・栄養管理まで、標準かつ最先端のICU管理を行っています。

専任医師に加え、心臓血管外科、循環器内科、呼吸器内科、麻酔科の協力のもと、多職種が一丸となり日夜良好なチーム医療を実践しています。

2020年度はCOVID-19に翻弄された一年となりました。

COVID-19感染例に関しては、HCUで疑似症例も含め中軽症例の受け入れを始めましたが、府内医療切迫に伴い、重症例も受け入れる事となりました。

PCPS、IABP、透析、呼吸器とフル装備の疑似症や、重症COVID肺炎で人工呼吸器管理を要す例もありましたが、看護スタッフをはじめ多職種の奮闘により、現時点までクラスター発生や、職員の院内感染をきたすことなく当院のCOVID治療の一翼を担っています。

COVID-19対応で制限された状況下でも、ICUでは、ECPR後PCPS離脱等、重症例治療の質を落とす事無く、一定の水準を維持した集中治療を行いました。

今後の展望と課題

まだまだCOVID-19感染の趨勢は不透明で、今後更に困難な状況に陥ることも予測されます。COVID-19重症例の受け入れも含め、引き続き満床運営を目標としますが、COVID-19の長期化に伴い職員の負担が過大とならないように対策をたてることが課題と考えます。

総合診療センター

担当医

○藤本 卓司(救急総合診療科部長)

認定資格：ICD(Infection Control Doctor)／麻酔科標榜医／京都大学医学部臨床教授

○大矢 亮(副病院長 兼 総合診療センター長 兼 救急総合診療科部長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医JMECCインストラクター／日本救急医学会ICLSディレクター・インストラクター／日本プライマリ・ケア連合学会認定医・指導医・SDH検討委員会委員／大阪府医師会ACLS大阪認定ディレクター・認定インストラクター／臨床研修指導医／日本静脈経腸栄養学会TNT研修会修了／日本老年医学会高齢者医療研修会修了／HANDS-FDF2014修了／認知症サポート医／日本HPHネットワーク運営委員

○川尻 英子

認定資格：日本プライマリ・ケア連合学会家庭医療専門医・指導医

○藤本 翼(救急総合診療科医長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・JMECCインストラクター／日本プライマリ・ケア連合学会認定医・指導医／日本救急医学会ICLSディレクター・インストラクター／大阪府医師会ACLS大阪認定ディレクター・認定インストラクター／臨床研修指導医／日本静脈経腸栄養学会TNT研修会修了

○杉本 雪乃

認定資格：日本内科学会認定内科医JMECCインストラクター／日本救急医学会ICLS認定ディレクター／大阪府医師会ACLS大阪認定インストラクター／臨床研修指導医／日本静脈経腸栄養学会TNT研修会修了

○河村 裕美

認定資格：日本内科学会認定内科医JMECCインストラクター／日本救急医学会ICLSインストラクター／臨床研修指導医／日本静脈経腸栄養学会TNT研修会修了

活動報告

2020年度は新型コロナウイルスの影響を大きく受ける1年となりました。2020年2月の段階で大阪府の要請で開設した帰国者・接触者外来はERと一体となって運用し、年度末までに800人を超える患者を受け入れてきました。救急車の受け入れは5年ぶりに年間6,000台を下回りましたが、市内全体で10%以上も救急搬送数が減る中で発熱患者を含め「断らないER」を実践するための工夫を重ね、院外心肺停止は2019年度の約1.5倍、大阪市内からの救急車受け入れは例年の約2倍の実績となりました。

病棟活動では8月から軽症中等症新型コロナウイルス患者の入院受け入れを正式に開始し、年度末までに100人ほどの患者さんの治療を行ってきました。第三波に入院後重症化し重症管理病院に転院となる患者さんを何人も経験したことで、重症化させない入院管理について経験値を上げることができました。

教育面の活動として特筆すべきは第229内科学会近畿地方会において、2年目西進介先生の発表が優秀賞を受賞したことです。これまで若手奨励賞の受賞はありましたが、優秀賞受賞は初めての快挙でした。

今後の展望と課題

新型コロナウイルスの流行がいつまで続くのか見通しが立てにくい状況ですが、これまで通り地域支援病院として地域で求められる役割を発揮できるよう力を尽くしていきます。具体的には新型コロナウイルスの外来と入院での対応と発熱を含めた断らないERへの期待が大きいいため、他科の協力も得ながらニーズに応じていきます。

学術面・教育面では日々の診療のレベル向上に努めながら、全国学会などより大きな学会での報告や論文作成などさらなるレベルアップを進めていきます。

● 循環器センター(循環器内科)

担当医

○石原 昭三(副病院長 兼 循環器センター長)

認定資格：日本内科学会認定内科医 総合内科専門医・指導医／日本循環器学会循環器専門医／日本心血管インターベンション治療学会専門医・指導医／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(心臓機能障害)

○鈴鹿 裕城(循環器内科部長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本循環器学会循環器専門医／日本心血管インターベンション治療学会専門医

○具 滋樹(循環器内科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医／日本循環器学会循環器専門医／臨床研修指導医／心臓リハビリテーション指導士

○松岡 玲子(循環器内科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医／日本循環器学会循環器専門医／植え込み型除細動器(ICD)・ペーシングによる心不全治療(CRT)実施医

○梁 泰成(循環器内科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医／日本循環器学会循環器専門医

○宮部 亮

認定資格：日本内科学会認定内科医／日本心血管インターベンション治療学会認定医

活動報告

2020年度はPCI 565件、アブレーション 85件、PTA 61件とアブレーションおよびPTAは減少したが、PCI件数は増加した年であった。COVID-19感染症のため当科から人員派遣も行いながらも各々の件数の維持ができ、大きな合併症がなく経過することができた。

COVID-19感染症のなかでも開業医訪問や地域との勉強会などによって他院との関係を密に保つことができ紹介患者さんの維持および処置件数の維持につながったと思われる。

循環器内科の処置は侵襲的なものが多く合併症が死につながることもある。そのため毎週月曜日に多職種でカンファレンスを開催し振り返りを行い、改善点を検討した。また、木曜日、金曜日は8時からカンファレンスを行うことで入院患者さん、カテーテル治療などについて医師間で情報を共有した。

今後の展望と課題

1) カテーテル治療のレベルの維持、件数の維持

COVID-19感染症がまだまだ改善しないなか当科からも支援が必要ではあるが、引き続き開業医訪問を

継続し必要な患者さんの処置の維持をしたい。その中で合併症に注意し皆が高いレベルで治療できるように教育/指導していく。

2) 生理学検査および心不全加療のレベルアップ

心不全治療および生理学検査をレベルアップすることを期待する。

3) 若手医師の教育

後期研修医1名がスタッフ医師となり、新たに後期研修医1名が加わる予定。若手医師も例年加わっておりカンファレンスを身のあるものとし教育していくことが必要と考える。また、学会活動が2020年度は不十分であったので2021年度はもう少し力を入れていきたい。

● 循環器センター(心臓血管外科)

担当医

○井上 剛裕(心臓血管外科主任部長)

認定資格：日本胸部外科学会認定医/日本外科学会外科専門医/心臓血管外科専門医・指導医/堺市身体障害者福祉法指定医師(心臓機能障害)

○札 琢磨(心臓血管外科部長)

認定資格：日本外科学会専門医・指導医/日本心臓血管外科 専門医・修練指導医/心臓機能障害植込型除細動器・ペースングによる心不全治療実施医/日本移植学会移植認定医・植込み型補助人工心臓実施医/日本血管外科学会認定血管内治療医/胸部・腹部ステントグラフト内挿術実施医・指導医/浅大腿動脈ステントグラフト実施医/臨床研修指導医/堺市身体障害者福祉法指定医師/難病指定医

活動報告

2020年度は手術件数が増加しました。手術・周術期治療を行ううえで、安全性の質を確保しつつ効率的な連携体制が構築できるよう医療スタッフ、地域連携、循環器センターサポートチームとの協働も強化してきました。そして、新型コロナ肺炎流行が継続するなかで不具合なく、術前からの周術期管理を安全に行えています。

心臓血管外科専門医認定修練施設(近畿大学病院)の関連施設認定を取得し、2年経過しました。大学病院からの患者さんはもちろんですが、その他の専門施設からの患者さんも含めシームレスに受け入れしています。多疾患併存した心臓血管外科患者様が多く、心不全再増悪、再入院、重症化予防が喫緊の課題と考えています。そのためにリハビリテーションを含めた多職種チームによる多面的、包括的な疾患管理が必要で、地域医療支援病院の1部門として役割を果たすよう努めています。

また日本心臓血管外科手術データベース(JCVSD)に参加登録し、各種学会発表参加も定期的に行っています。

今後の展望と課題

長寿化がすすみ、近年平均寿命と健康寿命の差である不健康期間は短縮し、健康寿命の格差は縮小しています。しかしまだまだ大きな開きがあり、不健康期間の短縮が求められます。また循環器疾患は介護が必要となる比率がたかく、医療費が最もかかるため、その対策強化は重要な課題です。心臓血管外科治療を行うことで、不健康期間の短縮、介護介入を軽減し、医療費の効率化に貢献できればと考えています。

2020年から新型コロナ肺炎が流行し、2021年も艱難な時期が継続するなかで、医療スタッフを含めた医療資源に負担をかけないことが必要となります。そして今後、少子高齢化、情報化社会が進み、価値観の相違や権利意識が強くなるなか、必要な時期に必要な治療、手術が受けられる環境を整えることが大切です。心臓血管外科治療が、有効性かつ継続性のある地域医療の役割を担えるよう、遠くを見据え日々の業務に粛々と取り組みたいと考えています。

● 消化器センター

担当医

- 山口 拓也(副病院長 兼 消化器センター長)
認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本内視鏡外科学会技術認定医／日本消化器内視鏡学会専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医
- 岩谷 太平(消化器内科部長)
認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本消化器内視鏡学会専門医・指導医／日本消化器病学会専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医
- 岡田 正博(消化器内科部長)
認定資格：日本内科学会認定内科医／日本消化器内視鏡学会専門医／堺市身体障害者福祉法指定医師(肝臓機能障害)
- 松田 友彦(消化器内科医長)
認定資格：日本内科学会認定内科医／臨床研修指導医
- 河村 智宏
認定資格：日本内科学会認定内科医／臨床研修指導医／日本救急医学会ICLSインストラクター
- 平林 邦昭(大腸・肛門科部長)
認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本消化器外科学会認定医／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(小腸機能障害)(膀胱又は直腸機能障害)
- 裕野 孝治(乳腺甲状腺外科部長)
認定資格：日本外科学会外科専門医／日本消化器外科学会認定医／臨床研修指導医
- 吉川 健治(肝胆膵外科部長)
認定資格：日本外科学会外科専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／堺市身体障害者福祉法指定医師(肝臓機能障害)
- 戸口 景介(外科部長)
認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／厚生労働省認可麻酔科標榜医／日本消化器内視鏡学会専門医・指導医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・指導医／日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医／日本ヘリコバクター学会H.Pylori(ピロリ菌)感染症認定医／日本腹部救急医学会腹部救急認定医／麻酔科標榜医
- 外山 和隆(がん支援副センター長 兼 外科部長)
認定資格：日本外科学会外科専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医
- 中江 史朗(腫瘍内科部長)
認定資格：日本外科学会外科専門医・指導医／日本消化器外科学会専門医・指導医／日本消化器内視鏡学会専門医／日本大腸肛門学会専門医・指導医／日本消化器病学会専門医・近畿支部評議員／日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医／医学博士
- 中川 朋(消化器内科部長)
認定資格：日本外科学会外科専門医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・指導医・消化器がん外科治療認定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医
- 富岡百合子(外科医長)(～2020/9)
認定資格：日本外科学会外科専門医／日本救急医学会救急科専門医・ICLSインストラクター
- 土居 桃子(2020/10～)
認定資格：日本外科学会外科専門医／日本消化器外科学会消化器外科専門医・指導医
- 今井 稔
認定資格：日本外科学会外科専門医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医
- 安田恵津子
認定資格：日本内科学会／日本消化器病学会
- 櫻井 史歩(後期研修医)
認定資格：日本内科学会認定内科医

活動報告

消化器センターは大きく前進しました。消化器センター内科では食道、胃、大腸の内視鏡検査及びESDも大きく件数をのばしております。内視鏡検査では“痛くない”を合言葉にスタッフ一同邁進しております。

また、上部、下部の出血に対しては24時間365日緊急対応できるように体制を強化しています。悪性疾患等による消化管閉塞に対してはステント治療を広くとりいれ、速やかな手術療法への移行を行い低侵襲な治療を可能にしています。胆道系疾患に対する緊急ERCPも過去最高を記録しています。

消化器センター外科では消化管外科、肝胆膵外科、乳腺甲状腺外科、ヘルニア外科などを主に行っています。腹腔鏡下手術が大勢を占めており、胃、大腸にとどまらず、肝胆膵まで腹腔鏡下手術で行うようになって

てきました。肝臓腫瘍に対しても、腹腔鏡下エコーを用いたラジオ波治療も積極的におこなっており南大阪でも指折りの件数となっております。今年度はICG対応4K内視鏡カメラへも導入しました。今後はロボットの導入に向かい準備中です。

2020年度もコロナ禍でありながら、過去最高の症例(消化管穿孔、胆嚢炎など数多い症例)をご紹介いただきました。

このように消化器センター内科、外科、専門スタッフのコラボレーションの上、患者さんには最善、最短、低侵襲を合言葉に満足のいく質の高い治療を安全に提供できていると自負しております。

がん診療拠点病院としての使命を果たすことができるよう、ますますシームレスな医療を展開し、患者さんに対して満足度の高い、質の高い治療を提供しつづけてまいります。

今後の展望と課題

- がん診療をさらに充実させ、集学的治療、放射線治療導入への道筋をつけてまいります。
- 専門的な治療を拡充し専門スタッフの更なるスキルアップを行い患者さん満足度の高い医療を提供してまいります。
- 全職種横断的な総合カンファレンスが毎週開催となり、一層、患者さんやご家族の想いを充分かなえるような治療をチームで提案します。
- 上部、下部消化管、肝胆膵分野ごとのエキスパートの育成を行い、患者さんにさらに質の高い治療を提供しつづける努力をおしめません。
- 腫瘍内科、緩和ケアチームと密接に連絡をとりあい、漢方治療などの補完医療もとりいれ、質の高いケアを提供してまいります。

腎・透析センター(腎臓内科・透析)

担当医

○大矢 麻耶(腎・透析センター長 兼 腎臓内科部長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本腎臓学会認定腎臓専門医・指導医／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(腎臓機能障害)

○植田祐美子

認定資格：日本内科学会認定内科医／日本腎臓学会認定腎臓専門医／日本フットケア学会認定フットケア指導士／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(腎臓機能障害)

○熊澤 実

認定資格：日本内科学会認定内科医／日本腎臓学会専門医・指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(腎臓機能障害)

○林 研(非常勤)

所属学会：日本内科学会／日本腎臓学会／透析療法学会／日本下肢救済・足病学会／日本フットケア学会／堺市身体障害者福祉法指定医師(腎臓機能障害)

活動報告

腎臓内科分野として、腎障害への原因検査としての腎生検が年々増加傾向となっている。2020年度も臨時を含めた腎生検は増加の一途である。また抗GBM抗体陽性腎炎など複雑な疾患もあり、選択的血漿交換も行えた。昨今ますます当院への腎臓内科としての役割が強くなっているように感じる。今後、腎病理を含め、さらなる経験の蓄積が重要と感じる。

また透析分野では、新規導入も変わらず多数あるなか、維持透析中の緊急入院が増えた。COVID-19の影響もあり、他院での受け入れ困難が続き当院での需要が高まったと考える。透析医療が様々な影響で体制が崩れる厳しいものだと感じた。維持透析中患者での発病はADLを低下させ、これまでいた自宅での生活が難しくなることが多くなった。療養病院での受け入れ体制も厳しく、今後重要な課題になってくると思われる。患者の意思にそった選択肢を増やせるように検討したい。

今後の展望と課題

腎臓内科として、腎生検をはじめとした腎症に対する治療について深めていく必要がある。

透析治療について、予後を伸ばし、QOLを保てるような、希望を持った透析生活をおくれるサポートをさらに追求していく。

代謝・膠原病内科

担当医

○川口 真弓(代謝・膠原病内科部長)

認定資格：日本内科学会総合内科専門医・指導医／日本糖尿病学会糖尿病専門医・指導医／リウマチ登録医／堺市身体障害者福祉法指定医師(肢体障害)

○岩崎 桂子(代謝・膠原病内科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医／臨床研修指導医

○松廣 有紀

認定資格：日本内科学会認定内科医

活動報告

関連が強い腎臓病グループと同じ病棟でチームとしてカンファレンス・回診を行い入院・外来診療にあたっています。

【糖尿病内科】

○2020年度診療内容

- ・年間を通して教育入院患者の受け入れ
- ・糖尿病を基礎疾患にもつ重症入院患者の加療
- ・他院からの重症例の受け入れ
- ・外科系各診療科の内科マネージメント
- ・南大阪糖尿病協会糖尿病ウォークラリー共催
- ・総合病院 糖尿病紹介外来担当、サテライト診療所(高砂クリニック)での糖尿病外来を担当
- ・堺北診療所 糖尿病外来を担当
- ・開業医からの紹介を受け入れ、入院及び外来フォロー等で連携
- ・研修医の教育

今後の展望と課題

後期研修医もローテートで回ってくるが増え、カンファレンスも活気が出てきました。糖尿病診療のスキルを生かし急性疾患のみならず、慢性疾患を診ることのできるチーム医療を目指し、その楽しさを研修医の先生にも経験してもらえるような研修システムを作りたいと思います。

2021年度は外来通院の妊婦さんの糖尿病治療を専門医がフォローし、安全な分娩につなげるため、また開業医に受診されている妊婦さんの甲状腺異常のフォローをするため妊娠糖尿病外来が開設する予定です。外来部門との合同カンファレンスなどを通じて更なる連携を深めると共に開業医の先生との関わりも深めていくことで多くの患者さんが安心して病気と付き合っていけるよう支えていきたいと思っています。

呼吸器内科

担当医

○緒方 洋(副病院長 兼 呼吸器内科部長)

認定資格：日本呼吸器内視鏡学会気管支鏡専門医・指導医／日本アレルギー学会専門医／日本内科学会評議員・認定内科医／日本内科学会JMECCディレクター／日本救急医学会ICLS認定インストラクター・ICLS認定ディレクター・ICLS認定指導者養成ワークショップディレクター／大阪府医師会ACLS大阪認定インストラクター・ACLS大阪認定ディレクター／堺市身体障害者福祉法指定医師(呼吸機能障害)／臨床研修指導医

活動報告

- 1) COVID-19の蔓延により、有熟者を積極的に受け入れています。それに伴い肺炎患者の鑑別に胸部CT、気管支鏡などを積極的に用いて貢献しております。
- 2) 超音波内視鏡を用いた縦隔リンパ節生検(EBUS-TBNA)、および超音波プローブを用いた抹消病変の組織検査(EBUS-GS)では良好な成績を納めています。
- 3) 上記にともない、検査時間は従来と比較してながくなりがちになります。表面麻酔のみでは十分とは言い難く、検査を受けられる方が苦痛を感じることがないように、積極的に静脈麻酔をおこない、苦痛の軽減

に勤めております。

今後の展望と課題

検査手技の高度化、件数の増加に伴いより安全であることが求められており、引き続き安心安全の追求につとめて参ります。COVID-19に対する診断治療に貢献していきます。

呼吸器外科

担当医

○佐藤 泰之(呼吸器外科部長)

認定資格：医学博士／日本外科学会外科専門医／日本消化器外科学会認定医／ICD(Infection Control Doctor)／身体障害者福祉法指定医師

活動報告

呼吸器外科の手術件数は、2018年度5カ月間の21件(1年間換算で約50件)から2019年度55件、さらに2020年度は70件と増加しています。内訳は、肺癌などに対する肺葉切除術が30件(2019年度18件)、肺癌や肺転移などに対する肺部分切除術が18件(同11件)、気胸の手術が11件(同10件)、膿胸に対する手術が7件(同5件)、縦隔の手術が1件(同2件)、その他が3件(同9件)となります。手術件数も増加していますが、その内容的にも肺癌手術の著増など大きな手術の割合が増加しています。その内開胸手術は4件(同3件)で、他は局所麻酔手術1件を除く全てが完全鏡視下での胸腔鏡手術で行っています。術後肺瘻のため1例で再手術を要していますが、他は問題となる術後合併症はなく、再手術例を含め全て軽快退院されています。

2019年度から手掌多汗症の手術も導入し、同年に1例施行し良好な結果で順調にスタートできましたが、2020年度はコロナ禍の影響か手術例なしでした。

手術助手の定着化については、定期的水曜日に関しては週替わりながら非常勤の呼吸器外科医助手の定着により安全かつ手術時間の短縮が実現できています。

今後の展望と課題

現在の手術枠や助手体制の中で安全かつ適切な手術を行う上では、手術件数は現状が最大限かなと思われる。ただ、準緊急手術に関しては、固定メンバーのMEによる手術助手の安全な導入ができれば、手術件数の増加も期待できそうです。また、コロナ禍沈静後には、手掌多汗症手術も近隣広報の上積極的に行っていきたいと思っています。

チルドレン&ウィメン・ヘルスケアセンター(小児科)

担当医

○藤井 建一(センター長 兼 小児科部長)

認定資格：日本小児科学会小児科専門医・指導医／臨床研修指導医／堺小児科医会理事

○金子 愛子(小児科医長)

認定資格：日本小児科学会小児科専門医／日本プライマリ・ケア連合学会認定医／家庭医療専門医

○瀬戸 司

認定資格：日本小児科学会小児科専門医

○森定 基裕

認定資格：日本周産期・新生児医学会認定新生児蘇生法専門コース認定

○瀬邊 翠

所属学会：日本小児科学会／日本小児感染症学会／日本小児神経学会

○阿曾沼良太

認定資格：日本小児科学会小児科専門医／JPLS小児診療初期対応コース修了／NCPR Aコース修了

○佐藤結衣子

所属学会：日本小児科学会／日本小児神経学会

活動報告

小児科医師としては、昨年度と同じ、6名の常勤医と1名の後期研修医という体制でした。9階病棟は、小児科・婦人科と内科・外科との混合病棟(33床)でしたが、COVID-19感染症の対応として、5-6月はCOVID-19感染症専用病棟(疑い患者も含む)として運用し、小児科は他病棟にて規模を縮小して入院医療を継続しました。

7月からは、元の9階病棟で小児科・整形外科・内科の混合病棟で入院医療を継続しています。小児については、外来の患者数も激減し、入院患者も昨年度より半減してしまいました。秋頃に幾分患者数の回復傾向を認めましたが、年末年始の第3波の影響で入院患者数は伸び悩んでいます。感染症を中心に患者を受け入れていますので、COVID-19感染症の影響を強く受けています。

また、6年前から始めた重症心身障害児者のレスパイト入院(スマイルケア入院)も、COVID-19感染症のリスクを避けるために、3-6月は受け入れを中止し、7月から再開しています。幸いなことに、再開後も昨年度並みの入院実績を維持し、COVID-19感染症に留意しながら継続しています。

6階の産婦人科病棟では、7月よりNICU(新生児集中治療室)を3床開設し、当院出生の新生児を状態が悪化する前に治療介入して対応しています。出産数については、月に65名前後と比較的多いため、小児科としても新生児医療には力を入れています。そして、初期研修医の小児科研修も受け入れており、病棟医療を中心に研修指導しています。

救急対応としては、2018年4月より、夜間の当直体制(日曜日を除く)に変更し、救急車や開業医・急病診からの紹介を積極的に受けて、地域の小児救急に少しでも役立てるように対応しています。

今後の展望と課題

2020年初頭からのCOVID-19感染症の流行から始まり、学校の休校等を受けて、急性期の小児患者は激減してしまいました。今年度もまだCOVID-19感染症の影響は強く残っていますが、救急車や開業医の先生方からのご紹介は積極的に受け入れておりますので、積極的にご紹介いただき、連携を強めていきたいと考えております。感染症だけでなく、食物アレルギーや低身長症等の検査入院も実施していますので、地域連携室の方へご相談ください。また、レスパイト入院についても、感染防御の観点から、2021年4月末より、再度受け入れを全面的に中止していますが、感染の収束を見極めて安全の確保が確認出来次第、再開していく方針としています。

外来については、法人が往診に特化した診療所を立ち上げたので、それに合わせて、在宅障害児の小児往診を開始する方針で具体的に計画を進めています。

救急対応としては、2021年4月より、365日24時間の当直体制となり、救急車や開業医・急病診からの紹介を積極的に受けて、地域の小児救急に少しでも役立てるように対応していきます。

2020年度 疾患別統計

小児科入院数	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	総計
2020年度	32	35	66	71	63	97	79	67	42	49	70	58	729

2020年度 上位疾患

疾患名	件数
妊娠期間短縮、低出産体重に関する障害	207
てんかん	94
上気道炎	52
喘息	32
脳性麻痺	24
その他の感染症(真菌を除く)	22
骨軟骨先天性異常	18
その他先天性異常	17
ウイルス性腸炎	15
急性気管支炎、急性細気管支炎、下気道感染症	5
インフルエンザ、ウイルス性肺炎	2

チルドレン&ウィメン・ヘルスケアセンター(産婦人科)

担当医

○坂本 能基(副病院長 兼 センター長 兼 産婦人科主任部長)

認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医・指導医／日本産科婦人科内視鏡学会腹腔鏡技術認定医／日本女性医学学会認定女性ヘルスケア専門医・指導医／日本東洋医学会漢方専門医／母体保護法指定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医

○内田 学(産婦人科部長)

認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医／母体保護法指定医／麻酔科標榜医／日本乳がん検診精度管理中央機構マンモグラフィ読影認定医／産業医／堺市身体障害者福祉法指定医師(小腸機能障害)(膀胱又は直腸機能障害)

○松岡 智史(産婦人科医長)

認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医・指導医／日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍専門医／日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／日本周産期・新生児医学会新生児蘇生法専門コース修了

○高木 力(産婦人科医長)

認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医／母体保護法指定医／臨床研修指導医

○瀧口 義弘

認定資格：日本産科婦人科学会専門医／母体保護法指定医師

○松原 侑子

認定資格：日本産科婦人科学会専門医

活動報告

1年を通して、新型コロナ感染防止対策によりクラスターを発生することが無かった。

《産科》 妊婦から見た当院の魅力である以下の点を特に意識して取り組みました。

- ・総合病院であり、安全、安心、信頼がある
帝王切開率は一般病院と比較して低いが、新生児仮死が少なく、安全・安心・信頼のお産を実現できている
無痛分娩を安全に管理出来るように、ガイドライン安全基準を満たしている
超緊急帝王切開・母体救命処置法・新生児蘇生処置法を訓練し、実施できている
NICUが設備され運営されている
- ・分娩費が他院と比較して安く、良心的である
分娩一時金内に分娩費用を設定
- ・母子同室 全室個室化(差額室料は無料)
家族のふれあいの実現が達成できている⇒新型コロナ感染防止対策で制限
休養をとりやすい環境を提供できている
- ・立ち会い分娩 陣痛期、分娩期を通して、家族とともに過ごせる環境づくり⇒新型コロナ感染防止対策で制限
- ・小児科との連携強化

《婦人科》

- ・婦人科3分野、腫瘍、内分泌、ウィメンズヘルスケアを網羅している
- ・腫瘍
がん：婦人科がん全ての癌手術が可能。放射線療法は他院と連携
内視鏡下手術(腹腔鏡・子宮鏡)：婦人科手術の約60%は視鏡下手術
- ・不妊症は保険適応内診療が可能
- ・ウィメンズヘルスケア 専門医による診療
女性心身症、更年期障害、適応障害、不安障害、産後うつ病、骨粗鬆症
婦人科内分泌学、心身医学、東洋医学をバランス良くミックスし、幅広い治療を行っている

今後の展望と課題

- ・医療の質をさらに高める努力をします。
- ・新たな命の誕生を祝福できる環境の整備を継続します。
- ・医師・助産師・看護師の数・質ともに向上させます。
- ・2021年度も新型コロナ感染防止対策を徹底します。

泌尿器科

担当医

○田原 秀男(泌尿器科部長)

認定資格：日本泌尿器科学会泌尿器科専門医・指導医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医・暫定教育医／堺市身体障害者福祉法指定医師(膀胱又は直腸機能障害)／医学博士

○沖 貴士(泌尿器科医長)

認定資格：日本泌尿器科学会泌尿器科専門医・指導医／日本泌尿器内視鏡学会泌尿器腹腔鏡技術認定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医

○松村 直紀(泌尿器科医長)(2021/1～)

認定資格：日本泌尿器科学会泌尿器科専門医・指導医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医

○大森 直美

認定資格：日本病態栄養学会NSTコーディネーター／日本医師会認定産業医・健康スポーツ医

○浜口 守(2021/1～)

所属学会：日本泌尿器科学会

活動報告

2020年度の手術件数は425件であった。例年に比べて約70件ほど減少した。コロナの影響によって医療機関への受診控えによる紹介数の減少、および急を要さない良性疾患の手術治療を待機としたことが原因と考えている。

今後の展望と課題

- ・泌尿器科医の4人体制
- ・MRI標的生検に対する紹介患者の獲得
- ・結石治療機器の充足による、対象患者の獲得

整形外科

担当医

○河原林正敏(副病院長 兼 整形外科部長)(2020/10～病院長)

認定資格：日本整形外科学会整形外科専門医／臨床研修指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(肢体不自由)

○吉岡 篤志(整形外科部長)

所属学会：日本整形外科学会／中部日本整形外科災害外科学会／日本骨粗鬆症学会

○小松 俊介

所属学会：日本整形外科学会／中部日本整形外科災害外科学会

○守津 汀

所属学会：日本神経学会／中部日本整形外科災害外科学会

活動報告

- ・当院整形外科では、骨折を主とした外傷の手術に加え、脊椎手術や人工関節置換術にも力を入れています。脊椎の手術は、大半の症例を顕微鏡視下で行っております。人工関節置換術には侵襲の少ないアプローチ法を導入しております。治療を受けられる患者さんの身体への負担を極力減らすべく、当科では低侵襲手術の導入と実践に引き続き取り組んでいきます。
- ・高齢化・併存疾患の重症化に伴い、近年は手術リスクの高い患者さんが増加しております。麻酔科、内科、循環器内科と連携し、必要時には他科との合同カンファレンス、他職種を含めた倫理カンファレンス等を行い、患者様にとってベスト、ベターな治療を提案しております。
- ・2020年度の総手術件数は456件で、前年度の477件からやや減少しました。脊椎手術は105件でした。

今後の展望と課題

2020年度は2名の後期研修医を受け入れます。京都民医連中央病院との連携を行い、新しい低侵襲手術・腰椎側方椎体間固定術(OLIF)の導入を進め、整形外科診療のさらなるレベルアップを図っていきたいと考えます。

脳神経外科

担当医

○田中 禎之(脳神経外科部長)

認定資格：医学博士／日本脳神経外科学会脳神経外科専門医・指導医／日本脳神経外科学会近畿支部学術評議員／日本脳卒中学会脳卒中専門医・指導医／日本救急医学会認定ICLS・BLSコースディレクター／日本救急医学会・日本神経救急学会認定ISLSディレクター／臨床研修指導医／共用試験医学系OSCE評価認定講習会修了／回復期リハビリテーション専従医研修会修了

活動報告

2020年7月26日：第69回耳原総合病院・西淀病院共催二次救命処置コース 参加
2020年10月11日：第70回耳原総合病院二次救命処置コース 開催
2020年12月13日：第71回耳原総合病院二次救命処置コース 参加
2021年2月14日：第72回耳原総合病院二次救命処置コース 開催

今後の展望と課題

かかりつけ医と地域連携をはかり、紹介・逆紹介患者数を増やします。
脳外科連携病院に、緊急治療が必要な患者さんを速やかに紹介します。
将来を見据え脳神経外科専門医、脳血管内治療専門医、脳神経内科専門医の獲得を目指します。
脳神経外科専門医が1名でも獲得できれば手術を開始します。
脳血管内治療専門医が1名でも獲得できれば脳血管内治療を開始します。
脳神経内科専門医が1名でも獲得できれば一次脳卒中センター(PSC)を申請します。
複数名のスタッフが揃えばSCUを設置、24時間体制で堺市の脳卒中急性期治療を行います。

リハビリテーション科

担当医

○田中 禎之(脳神経外科部長)

認定資格：医学博士／日本脳神経外科学会脳神経外科専門医・指導医／日本脳神経外科学会近畿支部学術評議員／日本脳卒中学会脳卒中専門医・指導医／日本救急医学会認定ICLS・BLSコースディレクター／日本救急医学会・日本神経救急学会認定ISLSディレクター／臨床研修指導医／共用試験医学系OSCE評価認定講習会修了／回復期リハビリテーション専従医研修会修了

活動報告

【総スタッフ数】理学療法士34名、作業療法士19名、言語聴覚士9名
【入院からリハ処方までの日数】平均0.98日 2日以内の処方割合97.5%
【回復期リハビリ病棟】50床
【回リハ専従スタッフ数】理学療法士21名、作業療法士9名、言語聴覚士2名
【回リハ平均提供単位数】5.9単位(脳血管疾患8.3 運動器4.1 廃用3.1)
【回リハ平均在院日数】53.0日
【在宅復帰率】93.0%
【実績指数】平均56.3点

ICUの超急性期から一般病棟、回復期リハ病棟、緩和ケアと多方面にリハビリを提供しています。
リハビリは2日以内に処方、早期介入による廃用症候群予防、合併症予防に取り組んでいます。
心臓リハビリテーション指導士による心臓リハビリを提供しています。
呼吸療法認定士による呼吸リハなど専門分野に取り組んでいます。
がんリハビリテーションにも取り組んでいます。
一般病棟では集団レクや認知症・せん妄対策に取り組んでいます。

今後の展望と課題

2025年問題に向け、今後益々回復期リハビリ病棟の需要が高まると考えられます。
回復期リハビリ病棟では、提供単位数確保のため休日リハビリを導入、継続していきます。
術前呼吸器リハビリテーションが開始され、さらに多くの患者さんに介入していきます。
患者さんに必要なリハビリ単位数を受けて頂くために、さらにスタッフの増員に取り組めます。
脳外科専門医としてスタッフを教育・指導し、質の高いリハビリ医療の提供を目指します。

緩和ケア科

担当医

○奥村 伸二(病院長) (~2020/10)

認定資格：日本外科学会外科専門医／日本麻酔科学会麻酔科認定医／厚生労働省麻酔科標榜医／プライマリケア連合学会指導医／堺市身体障害者福祉法指定医師(呼吸機能障害)／産業医／緩和ケア指導者研修会修了

○坂本 能基(緩和ケア科部長) (2020/11~)

認定資格：日本産科婦人科学会産婦人科専門医・指導医／日本産科婦人科内視鏡学会腹腔鏡技術認定医／日本女性医学学会認定女性ヘルスケア専門医／日本東洋医学会漢方専門医／母体保護法指定医／日本がん治療認定医機構がん治療認定医／臨床研修指導医／緩和ケア研修会修了

○金島 正幸(緩和ケア科医長)

認定資格：日本内科学会認定内科医／緩和ケア指導者研修会修了

○坂本 英代

認定資格：日本緩和医療学会認定医／緩和ケア指導者研修会修了

活動報告

- ・緩和ケア外来の新設(週1単位)
- ・緩和ケア病棟24床(全個室)、患者数320名/年
- ・ボランティア活動、遺族会はコロナ禍のため休止

今後の展望と課題

- ・コロナ禍による面会制限が緩和ケア病棟医療に与えた影響は大きい。面会制限により、入院での看取りから在宅での看取りにシフトしている。
- ・緊急入院受け入れや短期間での症状コントロールなど「在宅医療を支える」医療が今後重要になるとと思われる。

緩和病棟関連資料

	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
入院数	297	306	199	379	317
延べ患者数	7,563	7,274	8,209	8,295	7,608
病床利用率	89%	87%	96%	94%	87%
平均在科日数	22.6日	20日	24日	21.8日	23.7日

紹介先のリストと紹介数

紹介元	入院件数	面談件数
院内・法人内	168	186
堺市立総合医療センター	41	123
大阪労災病院	9	25
大阪国際がんセンター	3	11
近畿大学医学部付属病院	6	17
大阪急性期・総合医療センター	8	22
大阪市立大学医学部付属病院	7	16
その他	75	91
合計	317	491

持続オピオイド使用人数 229名
 持続鎮静使用人数 9名
 調節型鎮静使用人数 46名

入院してから1週間ごとの死亡数

	日数	死亡数
第1週	1~7	52
第2週	8~14	58
第3週	15~21	41
第4週	22~28	24
第5週	29~35	18
第6週	36~42	17
第7週	43~49	14
第8週	50~56	8
第9週	57~63	4
第10週	64~70	6
第11週	71~77	0
第12週	78~84	2
第13週	85~91	0
第14週	92~98	0
第15週	99~105	0
第16週	106~112	0
第17週	113~119	2
第18週	120~126	0
第19週	127~133	0
第20週	134~140	0
第21週	140~147	1
合計		247

緩和ケア研修会修了者 2020.4月 現在 82名

緩和ケア科	奥村 伸二	消化器内科	岡田 正博	麻酔科	杉山 円
緩和ケア科	坂本 英代	消化器内科	松田 友彦	麻酔科	南方 綾
緩和ケア科	金島 正幸	消化器内科	河村 智宏	放射線科	岩本 卓也
総合診療センター	藤本 卓司	消化器内科	櫻井 史歩	放射線科	楨谷 和紘
総合診療センター	松瀬 房子	産婦人科	坂本 能基	病理診断科	木野 茂生
総合診療センター	安田恵津子	産婦人科	内田 学	循環器センター	石原 昭三
総合診療センター	大矢 亮	産婦人科	松岡 智史	循環器センター	鈴鹿 裕城
総合診療センター	藤本 翼	産婦人科	高木 力	循環器センター	具 滋樹
総合診療センター	杉本 雪乃	産婦人科	岩田 隆一	循環器センター	松岡 玲子
総合診療センター	河村 裕美	産婦人科	瀧口 義弘	循環器センター	梁 泰成
腎・透析センター	大矢 麻耶	産婦人科	松原 侑子	循環器センター	宮部 亮
腎・透析センター	植田祐美子	代謝・膠原病内科	川口 真弓	小児科	藤井 建一
呼吸器内科	緒方 洋	代謝・膠原病内科	岩崎 桂子	小児科	阿曾沼良太
呼吸器外科	佐藤 泰之	代謝・膠原病内科	松廣 有紀	小児科	森定 基裕
整形外科	河原林正敏	外科	山口 拓也	小児科	瀬戸 司
整形外科	吉岡 篤志	外科	平林 邦昭	小児科	佐藤結衣子
整形外科	小松 俊介	外科	外山 和隆	小児科	金子 愛子
整形外科	守津 汀	外科	吉川 健治	専攻医	北川 綾美
泌尿器科	田原 秀男	外科	戸口 景介	専攻医	坂本 祥大
泌尿器科	沖 貴士	外科	中川 朋	専攻医	成田 亮紀
泌尿器科	大森 直美	外科	今井 稔	専攻医	池田 響
脳神経外科	田中 禎之	外科	碓野 孝治	専攻医	河村 明子
歯科口腔外科	柳澤 高道	外科	玉田沙也香	専攻医	小川 萌
歯科口腔外科	長谷川淳子	外科	富岡百合子	専攻医	南里 直実
心臓血管外科	井上 剛裕	組織健診科	矢野 佳子	専攻医	重原 良平
心臓血管外科	札 琢磨	精神科	森田 大樹	初期研修医2年	梶本 興平
腫瘍内科	中江 史朗	精神科	金 詩園		
消化器内科	岩谷 太平	麻酔科	木村 誠志		

精神科

担当医

- 森田 大樹(非常勤)
認定資格：精神保健指定医／日本精神神経学会精神科専門医
- 杉田 義郎(非常勤)
認定資格：精神保健指定医
- 大野 草太(非常勤)
認定資格：精神保健指定医／日本精神神経学会精神科専門医
- 金 詩園(非常勤)
認定資格：精神保健指定医
- 鈴木 基之(非常勤)
認定資格：精神保健指定医

活動報告

外来診療において、精神疾患全般の診療に当たりました。初診患者数は年間43人でした。受診年齢層は思春期から高齢層まで幅広くなっています。対象症例としては、家庭内や職場のストレス、トラブルが原因の神経症圏が最も多く、次にうつ病、続いて認知症症状、精神病の急性期や慢性期などでした。他の医療機関からの紹介患者も多く、年間19件ありました。

当院が総合病院である為、院内他科からの診療依頼も多く、コンサルテーション・リエゾン活動も活発に行いました。

また、当院のリエゾンチームには当科医師も加わっております。このため上記のような精神科医師への直接の診療依頼に応じる形だけでなく、せん妄の患者さんを中心にリエゾンチームとして依頼を受ける形もっております。この場合には「せん妄ラウンド」と称して、週に1回のラウンド(カルテラウンドを含む)も継続して実施しております。

更には、介護老人保健施設みみはらに入所されている方の精神症状が顕著となった場合の診察や、月1回の往診も継続しました。

今後の展望と課題

当院の精神科外来診療の特色と致しましては、当院が総合病院であるため、地域の精神科クリニックとは異なり、「他科との併診」という形の多さが挙げられます。つまり、「当院他科も受診している患者さん」の当科受診希望に対応していくことは、地域のニーズに応えるために欠かせないポイントであると考えており、今後も実践していく所存であります。

また、当科は病床を有しておりませんが、他科入院中の患者さんが様々な精神症状を呈した際に、主治医や病棟スタッフと共にアプローチを講じていく、いわゆる「リエゾン・コンサルテーション」にも重点をおいていきます。上述の通り、精神科医師が直接対応する形と、リエゾンチームが対応する形で今後も継続する必要があると考えております。

更には老人保健施設みみはらへの定期的な往診を継続して実施し、施設入所者さんの精神症状に対するアプローチにも取り組んでいきます。

麻酔科

担当医

○木村 誠志(麻酔科部長)(~2020/6)

認定資格：日本麻酔科学会専門医・指導医／厚生労働省麻酔科標榜医／医学博士／臨床研修指導医

○鎌本 洋通(麻酔科部長)(2020/7~)

認定資格：日本麻酔科学会専門医・指導医／日本心臓血管麻酔学会専門医／日本ペインクリニック学会専門医／周術期経食道心エコー認定医／臨床研修指導医

○杉山 円(麻酔科医長)

認定資格：日本麻酔科学会麻酔科専門医／厚生労働省麻酔科標榜医／日本周術期経食道心エコー認定医／日本心臓血管麻酔専門医(正式認定)／臨床研修指導医

○中村 佳世

認定資格：日本麻酔科学会麻酔科専門医／新生児蘇生法(Aコース)修了

○南方 綾

認定資格：日本麻酔科学会麻酔科専門医／日本小児麻酔学会小児麻酔認定医／日本周術期経食道心エコー認定医

活動報告

当麻酔科は2014年度から日本麻酔科学会認定病院となり、2015年度から麻酔科専門医研修プログラムに基づく近畿大学の病院群の基幹研修施設となりました。現在4名の常勤医と近畿大学麻酔科からの応援医師で手術室管理を行っています。新病院に移行してから6年たちますが、手術件数は2,178件、そのうち全身麻酔症例は1,310件と順調に増加しています。麻酔科の主な業務は臨床麻酔のほか、術前術後診察、研修医指導、緩和ケアや院内ペインクリニック関係のコンサルト、など多岐にわたりますが、一番の仕事は安全な手術麻酔管理により中央手術部門を円滑に運営することだと考えています。手術麻酔管理・集中治療はともに中央部門である為、他科の医師だけではなくコメディカルの方たちとのチーム医療が重要であり、良いチーム医療を遂行することは安全性の向上のみならず、医療の質の改善にもつながるものと思ひ、日々努力しております。

今後の展望と課題

当院での手術(特に全身麻酔下での手術)件数は今後も増加していく事が予想され、それらにより安全に対応し、患者さんにとっても快適な手術を受けていただくよう努力していきたいと考えております。

病理診断科

担当医

○木野 茂生(副病院長 兼 病理診断科部長)

認定資格：日本病理学会病理専門医・指導医／日本臨床細胞学会認定細胞診専門医／臨床研修指導医

活動報告

患者さんが病院に来られて、適切な治療を受けていただく為には、まず、適切な診断がなされることが必要です。その際に、しばしば「病理診断」が最終診断として大きな役割を果たしています。病理診断科の主な業務は 1. 細胞診断 2. 生検組織診断 3. 手術材料組織診断 4. 手術中迅速検査 5. 病理解剖の5つで、特に、がん死亡の2次3次予防について重要な役割を果たしています。

当科では、通常の染色や特殊染色に加え、一定の免疫組織化学的検索(50種以上)を活用し、正確な組織診断がなされる為の努力を行っています。さらに、診断に難渋する場合は、他施設の病理医を含めた検討や学会コンサルテーションなどの積極的活用を行っています。対象疾患は、内科系・外科系あるいは腫瘍・非腫瘍を問わず全ての疾患ということになります。特に、外科系であれば、消化器一般、呼吸器、婦人科、泌尿器の検体が多く、内科系では、肝生検、腎生検、皮膚生検、肺生検、骨髄生検をはじめ一般内科が取り扱う非腫瘍性病変全般も取り扱っています。また、各臓器の一般的な塗抹細胞診や吸引細胞診はもとより、細胞診断が重要な子宮がん、肺がん、膀胱がんなどのスクリーニング検査も行っています。

[主な検査機器]

1. 自動染色装置
2. 自動包埋装置
3. 自動尿標本作製装置

[カンファレンス等]

毎週行われる消化器外科、乳腺甲状腺外科、婦人科の術前術後カンファレンスに、病理医が直接参加し、総合的に患者さんの診断や治療方針に関する検討を行っています。また、解剖症例については、定例の院内臨床病理カンファレンス(CPC)を開催しています。

診断方法：

HE染色による病理組織診断、各種の特殊染色、酵素抗体染色による補助的組織診断。パパニコロウ染色およびギムザ染色による細胞診断、各種の特殊染色、酵素抗体染色による補助的細胞診断。セルブロック作製による診断。外注検査として、PDL-1、EGFR遺伝子変異解析、RAS-BRAF遺伝子変異解析、ROS-1、Her2/neu(FISH)やALK-IHC、MSI、蛍光抗体染色などの検査を利用しています。

今後の展望と課題

新専門医制度に対応するべく、専門医研修病院としての要件を満たす為に、協力いただける基幹型研修病院である大阪市立大学との連携を早期に実現していくことが求められています。初期研修の中で、選択研修としての病理診断科での研修の必要性をアピールし、総合的な意思の育成に寄与していきたいと思えます。

一方、現在、受託を行っている院所については、診断についてのさらなる精度管理、迅速性を追求し、的確な病理診断を提供できるように、随時、努力していきたいと考えています。一方、一人病理医の欠点を補うための方策として①嘱託病理医との連携②基幹型病院が行うカンファレンスへの参加③病理学会コンサルテーションや近隣の病理医のコンサルテーションの積極的活用などを追求していきます。

また、現在参加している婦人科、乳腺外科、一般外科系のカンファレンスのみならず、呼吸器科や泌尿器科など他科のカンファレンスへの参加を具体化していく必要があります。

放射線科

担当医

○岩本 卓也(放射線科部長)

認定資格：日本医学放射線学会放射線診断専門医／日本インターベンショナルラジオロジー学会IVR専門医／日本核医学会PET核医学認定医

活動報告

2020年度のCTおよびMRIの総所見数は25,911件となり、翌診療日にはそれぞれ62.8%、90.4%の所見の返却を達成することができた。またIVR件数は年間140件であり、TACEやシャントPTA、中心静脈ポートを中心に各科の依頼に対応できている。

また院内の学習会として主任看護師研修において“中心静脈ポート留置術”の講演を10月と11月の2回おこなった。

今後もより一層、各科の診療に貢献したいと考えている。10月には放射線科看護師に対し、“TACEについて”の勉強会を、12月には院内の勉強会で、主任看護師研修において“中心静脈ポート留置術”の講演をおこなった。

今後の展望と課題

和歌山医大放射線科との遠隔読影システムの運用をうまく行い、一層の所見時間の短縮や内容の充実を目指し、読影量の増加にも対応したいと考えている。また日本医学放射線学会認定の修練機関としてさらなる増員を希望している。

歯科口腔外科

担当医

○柳澤 高道(歯科口腔外科部長)

所属学会：日本口腔外科学会専門医・指導医／日本口腔感染症学会院内感染対策認定医・インフェクションコントロールドクター／臨床研修指導医／日本レーザー医学会安全教育講習修了

○岸本 裕充(非常勤医師)

兵庫医科大学歯科口腔外科学講座 主任教授

活動報告

2020年4月1日より常勤歯科医師1名、常勤歯科衛生士1名が赴任し、歯科医師3名(常勤2名、非常勤1名)、歯科衛生士3名(常勤3名)体制で診療を開始する。赴任にあたり①同仁会の歯科診療所との連携強化②全麻下手術症例の増加③退院時カンファレンス(多職種連携)の強化を託される。

新型コロナウイルス感染症の急速な増加にともない2020年4月7日に大阪など7都府県に緊急事態宣言が発出された。その影響で緊急性を必要としない手術(全麻・局麻とも)は中止、周術期患者も含め来院患者が激減する。

5月22日に緊急事態宣言が解除されたがすぐには手術ができず、7月1日より4月から手術を再開するも、手術室の体制(手術器具などの問題も含む)から週1例の実施に留まる。手術予定の待機患者が2カ月におよぶことから、8月より週2例の全麻下手術が可能となり、その後2021年3月末まで、ほぼ2例の予定手術を組むことができ、今年度の全麻下手術件数は62例となった。

歯科診療所との連携は順調で、かつ同診療所からの紹介患者の入院化率は、紹介患者数が多いにもかかわらず高率であった。

今年度から新たに退院時カンファレンスへの参加を開始、退院時カンファレンス(多職種連携)参加件数はこの1年間で173件であった。

今後の展望と課題

当科の診療の主体は周術期口腔機能管理であるが、今後これに振り分けられた保険点数が削減されることが予想される。したがって経営的な観点を考慮した場合、今後は院外紹介患者の診療への比重を増やしつつ、診療の幅を拡げる必要がある。また、院内の全麻手術症例が増加している現状で、全麻手術患者全員の周術期口腔機能管理を担っているため、就業時間内に診療が終わらない日も多々ある。当科の課題は、診療のボリュームに比して狭小となった診療スペース、ハード面の改善である。

